

面帯がずれ、邪魔になり外したという。数多くの人の治療をしたが五十余年ぶり、初めて患者に会った。八時間あまり泳ぎ、冷潮に堪えて収容されたが、その間に力尽きた者も多い。また、雷撃直後、懐中電灯を探し得たことが、治療等全て好結果になったのであった。思えば生死は紙一重であった。

自分は一看護手として海軍に籍を置き、大東亜(太平洋)戦緒戦から多くの仲間を助けることができ、また、自分も生き還ったことを思えば感無量である。

## ニューギニアの苦闘記

### 佐世保第五特別陸戦隊

高知県 岡田 浩 揮

戦後五十余年を経過し、私も大正十年生まれであるので、ニューギニアの戦記として、佐世保鎮守府第五特別陸戦隊の戦闘体験を執筆するに当たり、巻頭に、謹みて護国のための、瘴癘蕃雨のジャングルの中に、

あるいは南溟の果て、はたまた紺碧の大空に散華された、幾多の同胞の御冥福を祈ると共に、我々は、再び戦争の悲劇を繰り返すことなく、真の世界平和が一日も早く訪れることを心から祈念する次第である。

我々が、ニューブリテン島のラバウルから、イ号潜水艦により輸送され、「決戦場ニューギニア」へ輸送されたのは昭和十八年五月末であった。当時は、陸海軍の柱とも頼む連合艦隊司令長官山本五十六元帥が、ブーゲンビル島上空で米軍P38機により撃墜され、戦没された直後のことであり、ガダルカナル島も、ニューギニア戦局も、米濠連合軍に押され気味であった時であった。従って「決戦場ニューギニア」と記したのである。

潜水艦内から、甲板に出た時の空気の味は忘れることはできない。潜水艦から大発艇に乗り移り、さらにニューギニアに無血上陸。その時、これから続く死闘がどのようなものであるのか知る由もない我々は、上陸を小踊りして喜びあった。上陸した陸戦隊員三〇〇人余りは、我々の先遣隊が悪戦苦闘を続けている基地

サラモアへと向かった。

途中、B 17、B 24の猛爆を受け基地に着くと、栄養失調症の瘦せこけた土色の顔をした下士官と会った。

これから最前線サラモアで連日の死闘が続き、六月三十日、月岡司令官（部隊長）と副官は戦死され、ニューギニア方面の制空・海権は米濠軍に押さえられ、連日の空爆に耐えつつニューギニアの戦況は熾烈を極め、奥地では陸軍部隊と米濠軍の銃砲撃の轟がサラモア半島まで遠雷のように聞こえてくるようになった。

昭和十八年七月三十日午後六時、その日の戦闘も終わり、幕外の巨木の周りを取り囲むように並べられた、煙草盆のある竹製の長椅子を、大隊指揮小隊の十五、六人が占領して、今日一日の激戦の話に花を咲かせたり、負傷した兵隊たちの安否を気遣いつつ煙草をくゆらせていた。

それまで、毎日のように、遙か彼方の米軍陣地からサラモア半島の南側に向け、一日数百発という砲弾が撃たれては海中に落ち、水上高く水柱を上げていた。しかし、半島までは相当の距離があり、我々兵隊は一

向に気にも止めずにいた。そして、夕方には砲撃も止み、海面に小魚が翻っているのであった。今思えば風の前の静けさの中に、何かの予兆を感じさせるものがあったのかも知れない。

その時、突然、「もし今夜、米軍の航空機が来襲して幕舎がやられたら重要書類が灰燼に帰すことになるので、今すぐ書類全部を防空壕に運び込め」という考えが、私の頭にひらめいた。何者かから命令されるように感じとられたので、隣に腰を掛けていた同年兵にそのことを告げ、私が先に立って幕舎の中から手だいた書類を両手一杯に抱えて幕舎の隣にある防空壕の中に持ち込んだ。僅か二、三秒のことである。途端に壕の外では、天地も轟く大音響。しばらくは何が何だか分からなかった。続いて、第二、第三、第四、第五回と大爆裂音が炸裂してから、音響は止まった……。

私ども二人は、恐る恐る壕から顔を覗かせて外を見た。そこに見たものは、まさにこの世の地獄そのもの以外何物でもなかった。今まで、そびえ立っていた巨大な熱帯樹と共にいた十五、六人の兵隊は、木端微塵

に吹っ飛んで一片の肉片もなく、物凄いの煙の匂いが漂い、また、木片がその付近に飛び散って足の踏み場もない惨状だ。

後で分かったことであるが、米軍の砲台に新しく設備された長距離砲の試験的な第一弾が、運悪くこの熱帯樹に命中したらしい。私もは、砲撃が止んだので急いで防空壕の外に出た。そこで暮舎の隣にうごめいている人影が見えたので、急いで近寄ってみると、それは、大隊指揮小隊の専任下士官で、部隊の最上級下士官の蓮井米一上等兵曹（香川県出身）が倒れていた。私と同年兵は、直ちに駆け寄って、「蓮井兵曹、大丈夫ですか？」と言いながら二人で蓮井兵曹を防空壕の中に運び込んで寝かせたが、蓮井兵曹の右横腹には握り拳程の大きな傷痕があいていて、脈打つ度に血液が噴き出しているがどうすることもできなかった。しかし、蓮井兵曹は意識がはっきりしていて「残念だが俺はもう助からない。お前たちも充分注意しなければいけないぞ」と言いながら五、六分後に息絶えられたのである。泰然白若たる最後であった。

私も、今まで数々の対空戦闘や陸上戦の経験はあったが、巨大な砲撃に見舞われたことは、この時が最初であったので、弱冠二十二歳の若者にとっては計り知れない程の驚愕であった……。

さて、その日を境として、米軍の砲弾は毎日のようにサラモア半島の至る所で炸裂し始めた。夜間の砲撃はなかったものの、夜明けから日没までは、いつ、どこで巨大な砲弾に見舞われるかわからなかったため、部隊全員は恐怖のどん底に追い込まれた。日本軍の大砲では、到底届かないような遠距離から撃ってくる砲弾なので、我々には如何しようにもすることはできなかった。

爆撃も日増しにその回数が増していった。上陸当時「天の橋立」を想像させたような椰子の美林であったサラモア半島のそこかしこも、日ごとの米空爆と砲撃により、見る影もない風景に変わっていった。この砲撃により、我々陸戦隊員も随分多数犠牲になったのであった。我々陸戦隊員は、次第にサラモア半島の先端に近いジャングルの中に追い詰められていった。

昭和十八年八月二十日過ぎ、当時ラバウルにあった、第八海軍特別艦隊司令部から佐世保鎮守府第五特別陸戦隊は「いかなる戦略によっても差し支えないからなるべく兵員を損傷しない方法で、後方の安全地帯へ撤退せよ」との命令が伝達された。部隊は急遽慌ただしくなった。当時の部隊は、全員で約三五〇〇人ぐらいであった。渡辺司令を中心として、艦隊司令部方針に基づく綿密なる撤退計画が練られたようであったが、私は一兵員であったので、詳細についてはわからなかった。

八月二十五日ごろ、その計画が発表された。そのころサラモアよりやや後方で東部ニューギニア方面の最前線基地のラエという所があったが、それよりも海岸沿いの西方でフィンシユハーヘンという所に、昭和十八年八月初旬ごろ、アメリカ陸海軍部隊と航空部隊の合同で、敵前上陸によって飛行機も発着できる有力な前線基地が一週間ぐらいで建設されていた。そのため、海上撤退が到底不可能なことは十二分に承知されていたので、それ以外の計画としてはラエからジャングル

の中を切り開きながら、高峰サラワケット峠（標高四一〇〇メートル）付近を抜け出し、遙か西方の海岸キヤリに到着する方法をとる以外には、適当なる計画は見つからなかったようであった。

しかし、その事は非常なる難事業であった。当時のニューギニアには、精密なる地形図や地質図等は一切なかったのである。われわれの陸戦隊の大部分は、闇にまぎれて大型上陸用舟艇の大発と呼ばれる船舶で、五時間ぐらいかけてサラモアからラエに向かって移動を開始した。当時の大発は、相当数あったので、三晩ぐらいかけてほとんどの兵員の移動は完了した。ただし、一部の兵員は陸上からラエに向かって移動したのであったが、運悪く私の同郷で、二等兵曹（戦死後一等兵曹になった）山中三七吉氏など相当数の部隊員が、米濠軍と激戦の末戦没されたのであった。

ラエへ集合した佐鎮五特は、いよいよ昭和十八年九月四日に一週間分の白米を真新しい軍足に詰め込んで、若干のカンパンと共に荷造りを終わり、それぞれ自決用の手榴弾を二発ずつ渡されて、行き先の分からない

不安を抱えつつ前進を開始した。二発の手榴弾は、自決する場合に一発が不発であった時に使用する目的で渡されたのであった。

ラエを出発すると、直ちに大ジャングルの中へ入った。最初のうちは、山の勾配も穏やかであったが、道無き道を先発隊の伊藤中尉以下三十数人の兵隊が、灌木を切り開きながら進行するので、慌てたものではない。熱帯の真昼の行軍であるから、暑さのために汗は滝のように流れるし、喉はカラカラになるので歩きながら水筒の水を一気に飲み干すような状態であった。ところどころで小さな流れがあれば、どんな汚い水だか知らないけれども水筒の水を満たすためにわれ先にと奪いあうようにしながら進むのであった。

ところで、私には、不運にも出発二日目の夕方マラリアの発作に見舞われた。四〇度あまりの発熱である。しかも、行軍中の発熱であるからいかんともしがたい。それまでサラモアにいた時も、ときどきマラリアに襲われて苦労したことがあった。私の場合は『三日熱マラリア』といって一日おきの間隔で発熱する型の病氣

で、発作が起きるとガタガタと震え始め、何枚もの毛布を重ね着しても寒さは止まらず、やがて身体は熱くなり、四〇度を超える発熱となり、四〜五時間たてばだんだんと解熱してくるが、しばらくの間は頭がボーッとしていて欲も得も無くなる。

当時のニューギニアにはマラリア菌を媒介するアノフェレスという蚊が、昼も夜もあたり一面にブンブン飛び回っているので、蚊に刺されないということは、絶対不可能なことであった。内地から転入してきた元氣一杯ではちきれるような兵隊でも、二カ月も経つとマラリアにやられ、デング熱にやられ見る影もない身体になってしまふのである。

私は、この大熱ではとうてい部隊と行動を共にする事はできないと思い、上官に対し、「私をこのまま置いて、御慮なく前進して下さい。私はここで自決します」と申し入れたが、上官は「何を言う、お前をこのままにして我々が行軍できると思ふのか？ サラモアから長い間行動を共にして生死の間をくぐり抜けて来たお互いであるから、オレが背負ってでも、絶対、

見捨てることはできない」と言ってくれたので、同年兵や先輩の兵隊達も「俺も俺も」と言うことになり、病みついた私を三、四人交替でにわか作りのタンカに乗せてジャングルの山道を運んでくれたのであった。随分と有り難い上官のお言葉や同僚達の温かい御好意には、今もって頭の下がる思いを禁じえない次第である。

幸い私の熱病は、三日間で治まって大事には至らなかった。サラモアでは、発病したら快方に向かうまでに、最小限度二週間以上の日数を要していたが、今回は誠に思いもかけない短期間で全快し、その後四十日に渡る悪戦苦闘の踏破の連続でもただの一度も再発しなかったことは、私にとっては、ただただ幸運の賜物であるとしたか考えられないのであった。

ところでラエを出発して一週間ぐらいたった日に、夜が明けてみると見たことのある風景に出くわした。皆がガヤガヤ話していたところ、この地点は出発して一日歩いて到達した土地へ迷い戻って来ていたのだ。前述した通り、当時のニューギニアでは精密な地

図のような頼りになる資料は一切なかったため、先発隊の伊藤中尉もサラワケットの登り口へ進行するジャングル内を迷って判断したものとされたが、致し方がないことであつた。

やがて、その数日後にブス川と言う激流の河畔に到達した。毎日、夜間は豪雨になる季節のこの土地では、濁流が渦巻いて流れている急流であるから、いかんともし難い。ところで、先発隊の中には、さすが陸軍の工兵隊のような技術を身につけていた者が数人いたとみえて、その付近の丈夫な丸木の吊り橋を作り上げた。午後二時過ぎには頑丈な丸木の吊り橋を作り上げた。橋が出来ると、我々は喜んでその吊り橋を渡ったが、何しろ、急拵えの橋だから、ユラリ、ユラリと揺れて、渡るのに危険極まりない。中には川の中へ転落して、激流に流された者も数人出たが、比較的浅い川だったので、すぐ救い上げられたものであった。

私共の後続部隊でもキヤリ方面に向かった者は、渡った場所こそ違ったものの、皆、このブス川を渡らなければならなかった。毎日、山登りが続くので、喉の乾

きには恐れ入った。実は、海軍用水筒の水は一気呑みで、ところどころの小さな流れ水で満タンにして進まなければならない。

ある日、ちょうど休息していた所の傍で小さな流れに出くわしたので、私も数人の兵隊は一気呑みした水筒を満タンにしたが、何分その水量が少ないので、大部分の兵隊は小高い丘の向こう側に小川を見つけて、水筒だけ持ってその川まで行った。ところが、突如、丘の向こうのみんなが水を入れた所から、ダン、ダン、ダンと大きな銃声が、聞こえて来た。「スワッ！敵襲だ！」休んでいた一同は、大急ぎで銃砲を持って、丘の向こうに駆け上がった。そこで見たものは、川の向こうのジャングルから撃ってきた襲撃で、腹を撃たれた者、手を撃たれた兵隊、腕を撃たれた私の同年兵と数人が川の中に倒れていた。私もは、先方のジャングルの中に隠れていると考えられる相手方に対し、一斉射撃を浴びせかけたが、全然反応はなかった。すぐ川へ降りて、味方の負傷した兵隊たちを助け上げたが、行軍中、しかもこんな場所であるから、軍医

も看護兵も十分な手当ではできなかったようだった。胸を撃たれた兵隊は程なく死じた。まさかこんなところで射撃されるとは、夢にも考えられないことであつた。足を撃たれた兵隊は大したことはなかったので、歩行には差し支えなかったが、私の同年兵は腕を撃たれていたので、首に掛けた包帯で左腕を吊り下げて同行した。

それからは、部隊全体も十二分の警戒を怠ることなく進軍した。前述した通り、このころのニューギニアは夜間は豪雨である。夜間私もは急傾斜で寝なければならぬが、どこと言うでなく、全てが流れのような雨水に覆われるので、仕方がない。私は、すぐ近くに目を移すと、やや平坦な土地があつたので、海軍用のゴムがっぱで上の木を利用してその場所に大幕を張り、身体にかかる雨水を防ぐようにしてゴロリと横になった。背中は流れる水で濡れてゆくけれど、疲れ切っているの、そんなことは一向に気にもせず、ぐさぐさ深い眠りに入ってしまったのだ。朝、目が覚めると、背中一面ベッタリ濡れているが、疲れは充分取れ

ていた。若さゆえの回復力であった。

標高などは一切分からなかったが、だいぶ高い所と思われる山の上まで、原住民の掘った小屋があった。中に住民達は一切いなかったもので、一部の上官たちは、その空屋を借りて一夜の宿とした。ジャングルとジャングルの合間にある比較的平坦な土地であったので、われわれも宿泊するには、比較的楽な夜を過ごすことができた。

山は次第に急峻になってきた。ジャングルの木の根、草の根を踏みつけながらだんだんと上に登って行く。一山越えてほんと安堵したら、もう次の高い山が待ちうけている。大木が倒れて横たわってれば先発隊も成す術もなく、向う側まで進むのに、数時間もかかったこともあった。

こんな状況の中を進むので、一日の進行距離も僅かなものになってきた。何分標高四一〇〇メートルと言う、富士山よりはるかに高いサラワケットを越えて行かなければ、目的地のキャリと言う後方基地への到着はできないのであるから、並大抵のことではないので

あった。

もうこのころになると、一週間分の食糧はとうの昔に皆無となり、夕方野宮の準備をする時には、付近の食糧になりそうな草の根を集める作業に忙しくなった。そうして集められた雑草や木の根は、飯盒で煮て食用にした。今のような食べ物に満ち溢れた時代の人々に、こんな話をしても到底分かってもらえないものではない。たまに、野性の黒豚を追い掛け廻して捕獲した時は、最高の御馳走となったものだ。

暦もないのでラエを出てからどれほど経過したことか日時の記憶も定かでないが、だんだん寒さが身に伝わるようになってきたので、相当の標高の土地に居ることだけは分かった。このころになると、落伍する隊員が増え出し、元気で登っている者でもフラフラして、踏み締める足には力が入らなかったし、行動に見切りをつけたものとみえて、方々で手榴弾により自決した爆発音が谷底に響き渡っていった。

いよいよサラワケット四一〇〇メートルの頂上である。空は真っ黒に曇りみぞれが降っている。夏の軍装

の半袖シャツと半ズボンでここまで登ってきたので、身体は切られるように寒い。この付近は、樹木、草むらは一切なく、穏やかな比較的平坦なところであったが、夕方この場所に着いたのですぐ日が暮れてしまった、翌日まで分からなかった。ともかく寒さが厳しいが、温度を上げることのできるような焚物は何も見つかからない。皆それぞれがマッチは持っていたので、それまで肌身離さず持っていて、身を守ってくれていた銃床にそれとなく目が移った。この銃器は、我々軍人にとっては、命の賜物であるが、肌身離さず持っていた銃砲をわれ先にと持って集まってきて、次々に火中に投じていた。火の勢いは天を焦がすような有様であった、皆寒気から解放されて安堵の色を浮かべながら雑談を始めた。しかし、私にはどうしても今までわが身を守ってくれた九九式の鉄砲を火中に投げ入れることはできなかった。

私は、その場から少し離れた岩肌の暗闇を見つけ、自分の持っていた鉄砲を静かに置いて、何食わぬ顔で元の場所に帰って来て、皆と共に暖を取った。誰もこ

のことは知らなかった。

ところで、今度は眠気である。今まで身を切られるような寒さに襲われていた生身の身体が温かくなってきたので、眠さに見舞われた。しかし、私は入隊するまでに、冬期厳寒の土地で生活した経験があったので、寒さに対する考え方が、普通の人々とは少し違っていたので、「ここで眠ったら大変だ」と考え、私の口から大声で海軍の軍歌を歌い始めた。焚火を取り囲んでいた一同も、私の軍歌につられて大合唱となり、その合唱は谷底まで響き渡る状態であった。

やがて、一睡もせぬ中に、東の空がだんだんと白み始めて来た。私どもは助かった。ところで夜が明けてそこそこを見たとき、驚いたことにあちらでもこちらでも倒れている者が沢山いる。よく見ると昨夜の厳寒の中で眠ったまま凍死した人達であった。私どもの寒気に対して取った行動については、よくよく考えてみると「人間は、誰でも究極の場合に追い込まれたならば、わが身を救う為には最善の行動を取らざるを得ないのではないか？」と痛感させられた次第であった。

サラワケットの一夜が明けた。天気は上天気である。四一〇〇メートル（人により四五〇〇メートルと言ふ）の頂上から見る北岸からは一面の綺麗な雲海であつて下は一切見えない。私は、生まれて以来この時まで高峰へ登つたことは無かつたので、その時初めて雲海を見ることができた。今の人は、飛行機の上からでも、またテレビでも雲海を日常茶飯事に見ることができるようであるが、我々の若いころはそんなことはできなかった。

さて、これからは下り道であるが、一つ大きな問題が出てきたのであつた。それは、この山奥の道無き崖っぷちを、一步一步つる草を握りながら徐々に下降して行かなければならないような急峻に出会つたのである。他に歩いて下るような道は一切ない。また、夜が明けて初めて分かつたが、この四一〇〇メートルのサラワケットの頂上は絶壁の上であつた。北壁は、全く切り立ったような崖っぷちが、遙か下方の谷沿いまで続いているようであつた。一つ一つゆっくりゆっくり、この急な坂道を草の根や岩角を踏み締めながら下つて行

くことは、危険極まりない芸当であつた。ようやくにして、昼ごろ谷川の辺りまで辿り着けた。後で聞いたが、相当数の人たちが足を踏み外して転落して死んでいったようであつた。

谷川の水は、誠に綺麗な澄み切つた水であつて、ふと私の郷里の旧小川村の谷川を思い出していたが、現実はそんな生易しいものではなかつた。

これからも下り道であるが、同じようなジャングルをくぐり抜けて目的地キヤリに着くまでは大変なことであつた。このころになると、さしもの頑強な皮の軍靴もすり減つてしまつて用にならない物や、上着もロボロになつて身にまとうことができなくなつてきた者が沢山出た。帯剣だけは腰につけているが、飯盒のほかには缶詰の空き缶を腰の廻りに結び付けて、歩くたびにガランガラン音がする。正に敗残兵そのものの姿になつた。缶詰の空き缶は、おかずにする草の根を煮る貴重な食器であるので、絶対に捨てるわけにはいかないのである。

サラワケットを降り始めて四日目ぐらいたつたと思

うが、ギランとか言う原住民の集落に辿り着いた。そこには、陸軍の宣布班の兵隊がきていて「あなた方も、後二―三日降りれば食糧のあるところへ到着できる」と言われて、一同踊り上がって喜んだものであった。

途中メランピーピーとかいう所だったと思うが、そこも通過して、遂にニューギニア北部海岸のキヤリへ到着することができた。ラエを出発して以来約一カ月ぐらいいの間ジャングルの中を食うや食わずで、また、厳寒のサワラケットを越し、急峻な断崖絶壁を通りながら、漸くにしてこの地を踏むことができた。当時、私が一番不思議に思ったのは、熱帯のど真ん中にあるニューギニアで雪が降るということであった。

思えばサラモアを出発して以来、海軍佐世保鎮守府第五特別陸戦隊の約三五〇〇人の隊員は、元気でキヤリに到着した二九三人以外は落伍したり、戦死したり、行方不明になったりして一割弱ぐらいしかいなかったように記憶している。

この「ニューギニアのサワラケット越え」の兵員は、約七万人以上と言われているが、私どもはその第一梯

団の部隊であったため、比較的手近に食糧になる木の根、草の根があったので助かったが、後続の部隊の人々は、食う物の確保に随分と苦勞されたのではないかと思われる。

海軍佐世保鎮守府第五特別陸戦隊における私の配置は、大隊指揮小隊員であると共に一二ミリの機銃員であり、砲術科倉庫の責任者でもあったので、武器弾薬の数量をいつも把握していなければならなかった。砲弾も次第に減少してゆくが、全然補給されることはないので、心細い毎日が続いた。ラエからキヤリに向かう撤退の時は、名誉ある海軍軍艦旗手の助手として任命されたので、勇躍して、軍艦旗手である軍艦旗を奉持される山本上等兵曹（サラモアで戦死した連井兵曹の後任）に片時も離れず付き添って行動したものであった。なお、上等兵曹とは、陸軍の曹長と同等職である。

我々はキヤリから最終目的地のウエワークへ行くことになった。その当時は、前述した通り東部ニューギニアの制空権と制海権は、全部米軍と濠軍が掌握していたので、昼間は一切行動できず、夜間だけ行動する

ことにした。ちょうど陸軍の徴用した民間の船で、利用させてもらえる四〇〇人ぐらい乗れる船がキヤリにあつたので、これに乗せてもらうことになった。

ラエを出てからキヤリに着くまで約三十五日ぐらいかかったので、一同は疲れ切っており、早くウエワークに到着して海軍病院へ入院したいと考えていた。話によるとウエワークには、病院施設や飛行場もあつてニューギニアにおけるあらゆる設備の整つた有力な前線基地であつた。我々は全員が栄養失調症にかかつていたので、一日も早く治療しなければならなかつた。その夜は、日が暮れてから出航した。翌朝未明に次の停泊地に到着し、一同陸上に上がつて夕方まで休息し、その夜、また、航海をしながらウエワークを目指して日数を重ねていった。途中マダンと言う当時世界一の椰子の大美林のあると言われた土地を船で降りて、ゆっくりと椰子林の中を回ることができた。行けども行けども、椰子椰子の大林は、尽きることを知らない見事なものだったが、今はどうなっているのか、再び行つてみたい気がする。

さて、その日はどうしたことか、いつもより早く午後二時ごろ出航した。私どもは、「今日はえらく早い船出だが大丈夫だろうか?」と話し合つていたところ、遙か東方の雲の上に小さな機影を見つけたので、一同大喜びで久方振りに友軍機に出会つたものと思ひ、甲板の上で手を振りながら小踊りして大声を張り上げていたところ、その飛行機が雲の間からニューと姿を現わした。近づいて来る飛行機を見ると、驚いたことに米空軍きつての大型爆撃機コンソリーデーデットB24という方向舵の二つあるとてつもなく大きな飛行機であることがすぐ分かつた。私どもは胆をつぶしたが、今さらどうすることもできなかった。

船は大海原のど真ん中である。また、民間の船であるから一基の対空砲火もなければ、一丁の鉄砲もない。米機は攻撃されることはないと思つたのか、超低空の姿勢に入つて船の後方四五度ぐらいの角度で爆撃態勢に入つた。皆一同「大きな爆弾が降つて来るぞ!」と言ひ合いながら、今さら何の役にも立たないと知りつても、甲板の上につつ伏した。私はちょっと顔を上げて

上を見たところ、黒い点のようなものがポツリと飛行機から落とされた。途端にサーッと大きな音が聞こえたので急いで顔を伏せたところ、間髪入れずバーンと物凄い大音響と共に、船は左右に撃動した。幸いなことに直撃は免れていて右舷近くで大きな水柱が立った。米機が、そのまま前方へ上昇してから再び反転するのが見えた。「また来るぞ……」といやが上にも緊張が高まる。米機は再度爆撃態勢に入った。私はその時船長を見た。船長は必死の顔で操舵室から顔を出して弾の落ちる角度を見ながら船の運転をしている様子だった。続いて、サーッと爆弾が風を切る音が前より大きく聞こえた。私どもは、運を天に任せるしかなかった。同時に、バーン、バーン、バーンと大きな衝撃音が三回聞こえると同時に、小さな船は、ひっくり返る程の左右動がした。と、今度は銃撃である。二〇ミリの機銃掃射を浴びてきた。ドドドドドッと大きな音と共に船の甲板を薙ぎ倒した。「やられたー」「やられたー」甲板の上はそこそこで銃撃が命中した兵隊の血の海である。私は幸いなことに銃弾には当たらなかった。と

ところで、また、攻撃されると思っていた米機は、不思議なことにサーッと前方へ上昇したまま、遙か彼方へ飛んで行ったまま機影は見えなくなってしまうた。「助かった」皆一同ホッと胸をなで下ろした。

船長は近くの陸地目がけて船を走らせたが、何分全速力六ノットという走り方では、気が気ではない。ようやく陸地に近づくと、二〇〇メートルの所から気の早い者は、船からドボンと海中へ飛び込んで、陸地に向けて泳いで到着した。私どもは、その地で夕暮れまで休み、日が落ちてから再び出発した。

ウエワークまでの間、ハンサオという所も通ったが、この地もマダンと同様椰子の大美林であった。コンソリーデーデットの爆撃に懲りた船長は、最後まで、日没でなければ船の運行はしなかった。

ウエワークに着いた私たちは、全員海軍病院へ入院させられた。前述のように栄養失調症で痩せ衰えた身体を元通りに回復しなければならなかった。ウエワークの海軍病院では、担当の軍医から「佐鎮五特の兵隊は、長期間食うや食わずの生活が続いているので、腹

が減っていても決して一度に急激な大量の食事をしてはならない。おかゆからポツポツ胃腸を慣らしてから、だんだんと普通の食事にしなければ命の保証はできない」と言われたので、私どもは軍医の注意事項を忠実に守ってことなきを得たが、中には軍医の親切なる説明を聞かずに、夜間こっそり大食いをしたため命を落した者が沢山出た。食べ物が沢山あれば、人間というものは、自制するのがいかに難しいかということを思い知らされた次第である。

また、ウエワークで、私ども佐世保鎮守府第五特別陸戦隊は、解散命令が出ており、部隊を解散させられたのである。ウエワークでは、しばらく休養して、ポツポツ体力もついてきたので「ナビレ丸」という中型の商船に乗って、ひとまずパラオ島に到着した。

当時のパラオ島は楽園であったが、湾の入口では、内地から正月用品を満載してきた商船が、毎日のようにアメリカ潜水艦に撃沈させられていた。

私どもは、昭和十八年十二月下旬「常陸丸」と言う一万トンぐらいの大型商船に乗せられて内地送還とな

り、いよいよ懐かしの故国日本に向かうことができた。昭和十八年のニューギニアに初めて降り立った時、「上官の訓示通り再び日本の土を踏む事はない！」と覚悟を決めていたこの身にとっては、思いもかけないことであった。

また、当時の海上では米軍の潜水艦の跳梁により、日本の艦船は、次々と沈没させられていたので、運良く内地の土を踏むことは、容易なことではないと考えられたが、私どもは護衛する駆逐艦二隻に、昼夜商船の前後を警戒してもらって、米潜水艦の攻撃にも遭わずに、昭和十九年一月一日夜明けに、大分県佐伯港に無事到着できた。

今思えば、その時、船の甲板から佐伯の山並みの頂にある松並木を見た時に、「ああ、俺も日本の土を踏むことができたのだ」と、大いに感激した。人間の不幸と、運命の悪戯というものは、一切考えおよばぬことと痛感した次第であった。